



退職の月

黒石 孝
(新潟)

「どうですかここ痛いでしょう」と目で笑ひ医師は痛くてならぬ箇所押す

古希となり途端に転び負傷してわが退職の六月に入る

職退きて〈終った人〉にならむとすコロナの向かう見えた六月

退職の言葉考へ悔い少しコロナ、円安の盛りに退くは

〈新しい資本主義〉のやうにわからない今日の天気雨にやられつ

隣室に人を諭せる声すなり この娘辞めるといふは三度目

平日の休日は晴れ退職後こんなだらうとまづ飯を炊く

一輛の大糸線に乗ると決め秘湯で山菜食ふ会に行く

電気無き秘湯・雨飾温泉の〈都忘れの湯〉は蛇も入る

独活うどふき露の茎のさみどり生で飲み骨酒飲めり山のふるまひ

東京へ電気を送る鉄塔の立てる水田を雲ゆく刈羽

越後人は原発反対が筋なのと家ちゆうの電気妻消してゆく

バイクもう一台欲しとたはごとを子が言ひをりぬ大風の夜

血圧を測り朝餉の卓につくわが義務の鉢、野菜に対かひ

「山鳩」と言へば「ヤマバト」と返し来る孫に刻まれし日本語ひとつ

このごろの私

七十歳定年でいよいよ退職である。ところが五月の連休に筈探りで転倒し右膝靭帯損傷、いまだ治らず。その内に家のリフォームが始まった。夢に見ていた退職後だが今は忙しく痛い日々が続く。



薄色の陸

印出美由紀

(神奈川)

このごろの私
ガーデニングが苦手で枯らした鉢は数知れません。マンシヨンの大規模修繕でベランダの鉢を共用庭に移したところ、見違える程元氣になりました。束の間のバカンスを楽しんでもらっています。

海の字に母ゐて真珠婚のあさ海をみつむる夢に目覚めぬ

さうがめがそつと真珠を吐くごとく夫は仕上げぬ十五年越しの論

ラテン
羅旬語の古き遺言みごとを解く夫と米櫃のこめ減らしゆく日々

ポンペイの婦人のごとくペン銜ヘタベをタブララサにたゆたふ

あ
生れざりし子の誕生日は衣更着のころかふとんを被りて眠る

さういへばけふは春分夜に来てねこらが二重三重ふたへみへに呼び合ふ

夜半きみが右足かさつと顫はせて此岸の砂を踏みしめてゐる

片方の脇腹刺され十字架のイエスはアシンメトリーに果つ

クッションの無数のクロスステッチはそれぞれがふ小さき十字架

手を伸べて労ひくるる老婦人に明日が忌日の母の頭ちくる

母の胎蹴つた記憶はないけれどあたたかすぎて蒲団蹴る夜半

ばんまつり
蕃茉莉手折りてコップに挿しし母まだ認知症軽かりしころ

あさもよし紀の国出でし祖父おほぢの長女紀久子の長女の美由紀

登りゆき旗振山ゆ祖父おふは見けむふるさと紀伊の薄色うすいろの陸くが

ゆつくりと夕日を容れて凪ぎてゐる塩屋の海のわうごんのとき